

平成 23 年 5 月 11 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19730378
 研究課題名（和文）日本における高齢者福祉実践者の「実践知」形成過程に関する仮説的研究
 研究課題名（英文）A Study of Care Worker's "Theory in Practices" Formative Process

研究代表者 齋藤 征人 (SAITO MASATO)
 帯広大谷短期大学社会福祉科・専任講師
 研究者番号：90364132

研究成果の概要（和文）：

介護福祉士等に代表される高齢者福祉実践者は、実践の手本（モデル）の模倣や反面教師的な参考、またそこから得られたアイデアを実際に試みることや、これらの言語化・可視化を繰り返す中で「実践知」を形成している。また、こうした「実践知」の獲得を促進する因子としては、信頼できる職場の仲間や友人、他職種の知人などとのネットワークとそれらとの対話である。

こうして生成された視点や方法は、前述の過程を何度も繰り返しながら（循環）、その確かさを増していくものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：

Care Workers have formed the "Theory in Practices" in repeat these of languages and visualization, trying to practice model of imitation and ideas obtained from there. Factors to promote the acquisition of "Theory in Practices" is in interaction network Office trusted colleagues and friends with them.

Thus generated perspective and how that will repeat many times such process, while becoming more the certainty.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19年度	700,000	0	700,000
20年度	500,000	150,000	650,000
21年度	400,000	120,000	520,000
22年度	200,000	60,000	260,000
年度			
総計	1,800,000	330,000	2,130,000

研究分野： 社会福祉学

科研費の分科・細目： 社会科学 社会学 社会福祉学

キーワード： 社会福祉 高齢者福祉 実践モデル 実践知 M-GTA

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

社会福祉学において、実践と理論の乖離が取り沙汰されて久しい。その時々状況や場所、時間などを背景として、かつ人間という存在を対象としている社会福祉学は、実践と理論が分ち難く結びつき、両者が循環する関係が望ましいとされる。両者をつなぐための様々な提案は今から 30 年以上も前からなされてきたが、必ずしも奏効していない。

近年、他者から専門的に教授される「形式知」のみならず、実践者や障害当事者による自身の経験の積み重ねによって形成される「暗黙知」「実践知」の価値についても注目が寄せられるようになり、こうした知の形成過程を明らかにすることが、臨床現場の期待に少なからず貢献しうる実践理論の構築に、大きな示唆を与えると考えた。

2. 研究の目的

本研究においては、高齢者福祉実践の経験が豊富な介護福祉士等を対象として、高齢者やその家族との関わりやそこでの自らの変化、両者の相互作用等について聞き取り調査を行い、日常の実践をどう意識化し、経験則を見出すなどして、一般化・理論化につなげてきたのか、そのプロセスを仮説的に明らかにすることを目的とした研究である。

3. 研究の方法

高齢者福祉実践の経験豊富な介護福祉士等 12 人に、高齢者やその家族との関わりやその過程やそこでの自らの変化、両者の相互作用等について聞き取り調査を行い、日常の実践をどう意識化し、経験則を見出すなどして、一般化・理論化につなげてきたのか、そのプロセスを明らかにした。

聞き取り調査の方法は、半構造化インタビューによることとした。分析方法は質的研究法とし、修正版 M-GTA を採用した。

修正版 M-GTA を採用した理由は、第一にヒューマンサービス領域における研究に適していること、第二に社会的相互作用に関係し、人間の行動説明と予測に優れた理論を構築できること、第三に他のグラウンデッド・セオリー・アプローチと比べて、データの切片化をしないので、現象を大きな流れやプロセスなどを適切に捉えることができること、があげられる。

本研究は、調査協力者となる介護福祉士等の職域がヒューマンサービス領域であること、臨床現場における介護福祉士と高齢者やその家族との相互作用等に関係すること、さらに介護福祉士等が経験則を獲得していくプロセスを捉えることで、我が国の高齢者福祉分野における実践理論構築モデルを仮説的に提示するものであり、修正版 M-GTA を

採用することが最も適切であると考えられたためである。

4. 研究成果

本研究によって形成されたグラウンデッド・セオリーは以下の通りである。

(1) 介護福祉士等に代表される高齢者福祉実践者は、その職業に従事する以前から、高齢者福祉への関心があったり、また既存のサービスへの疑問やすでにその職業へ従事する先輩の影響などもあったりするなかで、問題意識や高齢者福祉実践への動機を高めていく。この問題意識をさらに刺激するものが、実際に高齢者と関わることから得られる援助対象者への親近感である。

(2) 実践の場に身を投じる中で形成・獲得される教訓的知識すなわち「実践知」は、実践の手本になる「モデル」の模倣や反面教師的な参考、またそこから得られたアイデアを実際に試みること、またこれらを言語化していくといった行為を反復・循環していく中で形成されていく。

(3) こうした「実践知」を獲得することを促進する因子としてあげられるのが、自らの実践を振り返るという行為だが、これは必ずしも自分自身の自己内対話だけにとどまらず、信頼できる職場の仲間や友人、他職種の知人などとのネットワークとそれらとの対話が「実践知」の獲得を促進する。

(4) 実践の場において利用者や利用者が抱える問題に臨むなかで「実践知」を獲得しながら、高齢者福祉実践者は高度専門職業人として成長していくわけだが、この成長とは、職業人としての成長のみを意味するものではなく、人としての成長と矛盾しない。

(5) 更なる問題意識や動機の再生産に至るか、あるいは離職・転職を考えるようになるかは、たとえば援助の過程で利用者から喜びを得たり、また職場や社会的によりスキルアップ・キャリアアップを試行したりすることが出来るか否かも大きな要素である。こうした実感が得られないときは理想と現実とのジレンマに現在の職場ないし職業を継続する意欲の低下を招くことになる。

(6) こうして生成された視点や方法は、必ずしも普遍的なものではなく、前述の過程を何度も繰り返しながら（循環）、その確かさを増していくものと考えられる。

以上の本研究による成果は、介護福祉士等の高齢者福祉実践者の「実践知」形成プロセ

スが、既に調査・研究に取り組んできた他の社会福祉専門職（社会福祉士、精神保健福祉士ら）の「実践知」形成プロセスの全体構造と、ほぼ一致することが解明できたことである。

これにより、今後の社会福祉専門職の養成のあり方や、現任者に対するサポート体制、生涯学習の方法等に示唆を与えることができるだろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

齋藤征人：高齢者福祉実践者の「実践知」形成過程に関する仮説的研究．帯广大谷短期大学紀要，査読有，48 号，2011，55-68.

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 征人 (SAITO MASATO)

帯广大谷短期大学社会福祉科・専任講師

研究者番号：90364132

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：